

石灰岩洞窟遺跡における旧石器人の生活跡の調査と人骨の探求

阿部祥人・○奈良貴史・佐藤孝雄・鈴木敏彦・渡辺丈彦・米田 穰・澤田純明・澤浦亮平

慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室を中心とする調査団は、動物骨や人骨の出土が期待できる石灰岩洞窟から旧石器とそれらの遺存体を同時に検出することを目的にして、青森県の尻労安部洞窟（安部遺跡）において2002 年より毎年調査を行っている。遺跡は、下北半島北東端の尻労集落の北にあり、桑畑山の麓で太平洋に面した標高約 33 メートルに位置している。

昨年までの 7 年間に行った調査では、次のような成果が得られている。

第 1 段階（1・2・3 層） 縄文時代後期～中期 人骨・動物骨を含む各種の遺物多数

第 2 段階（4 層） 縄文時代早期 8,700±50 calBP 土器・石器・動物骨各種

.....

（12 層）23,409±119 calBP （13 層）33,884±160BP 動物骨小片・焼骨など

.....

第 3 段階（15 層） 旧石器時代 20,000 calBP ナイフ形石器 ウサギの歯 ムササビの歯

本年夏の調査では、第 3 段階の昨年と同じ 15 層から新たな頁岩製ナイフ形石器と複数個体のウサギの歯を水洗選別（フルイ作業）によらず、原位置において多数とらえることに成功した。このように、石器と動物骨が比較的まとまった範囲に確認できたことによって、出土動物へのヒトの関与の可能性がより高いものとなった。また、12 層以下における偶蹄類の歯、焼骨、ムササビの歯の存在を加えると、本遺跡における旧石器時代の人類活動の証拠がより多様で、明確な形で得られたといえる。